

新 歌人群像

前田夕暮

変遷し続けた歌人

影山一男



生い立ちと文学に 目覚めるまで

前田夕暮（本名洋造）は一八八三（明治十六）年、神奈川県大住郡南矢名村（現秦野市）に父久治、母イセの長男として生まれた。前田家は代々、庄屋や戸長の家柄であり、また「油屋」の屋号で食用油や醤油の販売を行う裕福な家であった。夕暮の祖父の代次郎は、さらに落花生や煙草たばこの栽培、木綿の取引など手広く商いをして、前田家の財を築いていた。夕暮の父久治は、この代次郎の生き方に反発し、自由民権運動に加わり、神奈川県議

員や大根村長を引き受けるなどし、父代次郎の財産を消耗していった。夕暮はこうした祖父と父との軋轢あつれきの中で苦しみ、中学を休学し、各地を放浪したが、大磯の天野快三医師のもとに預けられ、そこで文学を志し一九〇四（明治三十七）年に上京、以後、終生帰郷することはなかった。夕暮の文学の根本を考える上で、こうした幼少年期の体験は一つの手がかりとなるだろう。因みに、夕暮の号は大磯時代から用い、西行の嶋立庵しまだちの碑「心なき身にも哀れは知られけり嶋立つ沢の秋の夕暮」から採ったものだろうと、夕暮の長子、透は推測している（『評伝前田夕暮』）。



「あざやかな青天の虹鱒 十和田は晴れやかにわれらによびかける」前田夕暮。
十和田湖歌碑と。1932(昭和7)年、50歳

白日社創立と牧水、 夕暮時代の到来

大磯時代に「新声」「文庫」などに投稿していた夕暮は一九〇四(明治三十七)年、尾上柴舟宅を訪れ「車前草社」に入門する。同時期に若山牧水も入門し、以後、二人は切磋琢磨してゆくこととなる。

一九〇六(明治三十九)年、二十四歳の夕暮は青山伝道教会で受洗する。このキリスト教体験は、短期間のものであったが、初期の作品形成の上で多大な影響を及ぼしていると言えよう。同年十月、夕暮は白日社を創設し「向日葵」発行の準備を始める。創刊号には若山牧水、三木露風の同人のほか、蒲原有明、

岩野泡鳴らが寄稿し、「明星」に対抗する雑誌として華々しく出発したが、二号で終刊した。夕暮はパンフレット歌集『哀楽第壹』(明治四十年十一月)、『哀楽第貳』(明治四十一年一月)を発行し、「詩歌」創刊(明治四十四年四月)を待つこととなる。

馬といふけものは悲し闇深き巷の路に
うなだれて居ぬ
大鳥よ空わたるとき何思ふ春の光を雙
の眼にして

『哀楽第壹』
『哀楽第貳』

夕暮の名を高めた実質的な第一歌集『收穫』(明治四十三年三月)は、牧水の『別離』(同四月)と並んで、「牧水・夕暮時代」と呼ばれる一時代を明治末から大正初期にかけて築くこととなった。それは「明星」の浪漫主義に対して、自然主義の短歌ということになるのだが、夕暮の自然主義には先述したキリスト教体験がまつわり、「收穫」にもさまざまな歌が混在する一因となっている。その一つは、夕暮自身が「神秘的色彩」(『哀楽第貳』序)と呼ぶ「魂よいづくへ行くや見のこししうら若き日の夢に別れて」のような歌であり、自然主義の歌としては「風暗き都会の冬は来りけり帰りに牛乳のつめたきを飲む」が代表作として挙げられよう。しかし、自然主義と

は言っても、現在の私達の概念にある自然主義や、文壇で使われる自然主義の定義とは違って、「自分は何時も通例人であらんことを願ふ。唯一箇の人間であつたらそれでよいと思ふ。通例人の思つたこと、感じたことを修飾せず、誇張せず、正直に歌ひたいと思ふ。」と『收穫』の「自序」に述べるような普通の人間が正直に歌う、という生き方が夕暮の自然主義なのである。ここに幼少期の体験と父久治の自由民権運動から受けた夕暮の人格形成が見てとれるだろう。

木に花咲き君わが妻とならむ日の四月
なかなか遠くもあるかな

現在でも愛唱される夕暮の代表作の相聞歌は、こうした中から生まれた。この恋愛の対象となった栢野繁子と一九一〇(明治四十三年)に結婚し、一九一一年「詩歌」を創刊した夕暮は、第二歌集『陰影』(一九一二年九月)、第三歌集『生くる日に』(一九一四年九月)、第四歌集『深林』(一九一六年九月)と時代の寵児として矢継ぎ早に歌集を出版してゆく。その中で「生くる日に」は「白樺」などの影響を受け、ゴッホ、ゴーギャンに傾倒し、自然主義からの脱皮を図った第二の転換点となった。

前田夕暮

粗き日の光のもとに監獄ぞあらはに立
てる煉瓦塀ながし

「生くる日に」

きちがひの眠れる部屋にあかあかと狐
のかみそり一面に生えよ

日蓮の生れし国の海岸に大魚かなしや
血にまみれたり

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと

高し日のちひささよ

「生くる日に」には右のような重い狂熱的な作品や、印象派の絵のような歌が混在している。それは、ゴッホやゴーギャンのほかに、「詩歌」に寄稿していた山村暮鳥や萩原朔太郎との交友と、暮鳥が「詩歌」に載せたボードレールの訳詩に触発されたこと、また牧水が「みなかみ」に口語破調の歌を収めたり、北原白秋の「桐の花」、斎藤茂吉の「赤光」の刊行など、同時代人の活動に多大な影響を受けたものと思われる。

口語自由律への転換

「深林」刊行後、一九一七（大正六）年に父久治が死去し、翌一八年に「詩歌」を休刊した夕暮は、父の遺した山林事業に従事し、歌壇活動を中断するが、一九二二（大正十二

年）に「天然更新の歌」を短歌雑誌に発表し歌壇に復帰、一九二五（大正十四）年第五歌集『原生林』を刊行し、歌壇活動中断期間の山林事業に関連した歌を発表する。

一九二四（大正十三）年、北原白秋、土岐善麿、釈道空などの歌人のほかに、詩人の大手拓次、大木惇夫や画家の中川一政、津田青楓などを同人として「日光」が創刊され、夕暮も主要同人として参加。自由詩や口語歌の実践を目的にしたりした夕暮は、一九二八（昭和三）年「詩歌」を復刊し、口語自由律運動を推進してゆく。「詩歌」復刊の年は、短歌革新の機運が高まり、プロレタリア文学と呼応するように「新興歌人連盟」が結成され、「詩歌」誌上にも矢代東村、柳田新太郎らの主要同人が口語自由律の歌を発表し始めた。この時期の夕暮の作品は、「駅前のぬれしたしきに赤き童女の着物がうつり海が揺れてゐる」といった口語発想ではあるものの、まだ自由律までには至らなかった。

夕暮が本格的に口語自由律歌に移行したのは一九二九（昭和四）年十一月号の「詩歌」に発表した「傾斜地」二十六首で、「自然のなかにおのれを押し進めみどりにまみれて蜂のやうにとぶ」のような作品が見られる。また同号の「吾等の行くべき道」という文章で、「可



歌人空中競速。1929（昭和4）年11月。47歳。
右から、土岐善麿、飛行士、斎藤茂吉、前田夕暮、吉植庄亮

成り自由な韻律で三十一音律を超え、或いは省略する場合がある」などと述べ自由律を認めている。夕暮の口語自由律歌を決定的にしたのは同年十一月二十八日に東京朝日新聞が企画した〈飛行機に乗って、機上から見た体験を短歌にするという実験〉で、斎藤茂吉、夕暮、吉植庄亮、土岐善麿が参加し、それぞれ二十首を発表した。

うしろにずりさがる地面の衝動から、
ふわりと離陸する。午前日の影

1939 (昭和14) 年、57歳。長男・透氏の入隊の朝に。
右は前田夫人



自然がずんずん体のなかを通過する——
山、山、山
一途に雲の上を飛びながら、青空の寂しさを初めて知る

当時として珍しい飛行機の搭乗体験が、うまく口語自由律とマッチしたのである。以後、夕暮は十三年間、口語自由律歌を作り続け、この飛行吟を取めた『水源地带』一九三二(昭和七)年九月、『青樫は歌ふ』(一九四〇年三月)、『烈風』(一九四三年二月)の三冊の歌集にその結実が収束された。

だしぬけに深夜の村落を押し流して、晴々と夜があける——朝焼雲 『水源地带』
野は青い一枚の木皿——吾等を中心にして遙かにかかるく回転する
沼はあとから私について来た。背なか
が青く染まるのを感じた 『青樫は歌ふ』
冬が来た、私の器官がむき出しになり、
木木のきしみ寂しい音をたてる
バスからおりて歩き出さうとした時、曇
天にずしんとあたまをうたれた 『烈風』
来た来た、むかふからよたよたと木炭
バスが来た、咳をして咳をして

定型復帰と晩年

一九四三(昭和十八)年、夕暮は突如として定型に復帰し、第十歌集『富士を歌ふ』(同年二月)を刊行する。そして、一九四五(昭和二十)年四月、埼玉県秩父郡入川谷に疎開し、翌年十二月まで入川谷で生活する。この間の歌は『耕土』(一九四六年七月)、『埴土地帯』(一九四七年八月、河出書房『現代歌集』第二巻)に収められた。

戦ひに敗れてここに日をへたりはじめ
て大き欠伸をなしぬ
『耕土』

チモールに病めるわが子を歎かへる吾
ならなくに坂道くだる
潤谷を日のさす方にあゆみつつ生きた
るものをみたしと思ふ 『埴土地帯』
老いづきて妻を愛しと思ふなり妻もし
かあらむ雪のあしたは

戦後の夕暮は、戦前の大家の多くがそうであつたように、戦争責任を問われ、とくに定型復帰が大きく指弾され、歌壇の第一線から退き「詩歌」の編集を続けながら、ひっそりと作歌していた。そして、一九五一(昭和二十六年)四月二十六日永眠。六十九歳であつた。死後、遺詠「わが死顔」十首が発見され、『夕暮遺歌集』(同年九月)に収録された。

ともしびをかかかてみもる人々の瞳
はそそげわが死に顔に
生涯を生き足りし人の自然死に似た
る死顔を人々はみむ
一枚の木の葉のやうに新しきさむし
ろにおくわが亡骸は

夕暮最後のこの一連は、近代短歌の最後の
光芒のように現在でも愛唱され続けている。

(かげやま・かずお「コスモス」選者)